

此の如く突厥は一旦其の可汗を殺されしも、國人は別に烏蘇米施可汗〔五三〕（即ち回鶻傳〔五三〕の烏蘇可汗）といふものを立て、餘勢を保ちしかば、唐の朔方節度使王忠嗣は、兵威を示して内附を勧めしも、可汗は之を肯ぜず、茲に於て忠嗣は反間を拔悉蜜に縦ち、葛邏祿・回鶻の二部と共に、烏蘇米施可汗を撃破せしむるに至れり〔五四〕、其の後二年即ち天寶三載に及び、舊唐書本紀に據れば

八月丙午〔五五〕九姓拔悉蜜葉護攻殺突厥烏蘇米施可汗、傳首京師

と記し、新唐書本紀も之に従ひたりと見え

八月丙午拔悉蜜攻突厥烏蘇米施可汗、來獻其首

と記せり、此の事件は新唐書突厥傳、舊唐書王忠嗣傳、冊府元龜卷九七三助國討伐篇等にも同様に天寶三載の事件として記され、拔悉蜜が烏蘇米施可汗を殺したる旨を記すること亦同じ、然るに新唐書葛邏祿傳には

天寶時、與回紇・拔悉蜜、共攻殺烏蘇米施可汗

として、此の役に葛邏祿及び回鶻の加わりしことを示し、唐會要にも回鶻の逸標苾即ち裴羅が天寶三載烏蘇米施を誅したる功を以て奉義王に封ぜられたる旨を記せり、回鶻・葛邏祿の二部は、天寶元年以來拔悉蜜の下に在りて、其の部長は各々左右の葉護たりしものなれば、此の際拔悉蜜と事を共にするは自然の勢にして、恐らく葛邏祿傳及び會要の記事は正鶻を得たるものなるべしと思はるゝが、近く見るを得たる Sine-usu の磨延賧の碑文に據れば、此の時回鶻は啻に此等の二部と協同の行動に出でたるのみならず、此の事件に於ける殊功は、實に回鶻の裴羅の子磨延賧に歸せざる可らざるを見る、即ち同碑北面第九行及び第十行に Ramstedt 氏に従がへば次の記事あり